エピローグ

〈する〉的と〈なる〉的ということ――これは単に言語についてだけ見られる類型なのであろうか。

現代を特徴づけている一つの事柄は、言語に対する深い関心であり、この関心を支えているのは、言語とは単なる「伝達の手段」（つまり、すでにまとまった内容に衣を着せるだけ）ではないという認識である。この認識から生まれた一つの方向は、言語の実用的機能に対立するものとしての「美的機能」を追求する（つまり、言語そのものに内在する無限の意味作用の可能性を探る）という形で、現代的な意味での「詩学」（poetics）として開花する。この言わば言語の内にあるものへ向けられた視線と並んで、もう一つは言わば外へ向けられた視線、つまり、言語というものの文化の中における位置づけを確認しようとする試みがある。この試みは、いわゆる「サピア＝ウォーフの仮説」（the Sapir-Whorf hypothesis）から最近の「文化記号論」（semiotics of culture）に至るまでさまざまな

形をとって来たが、それが辿りついた一つの視点は、文化現象とは要するに（疑似）言語現象であるということ――少し逆説的な言い方をすれば「文化は言語である」という仮説――であった。そのような仮説は、（例えばソ連のタルトゥ学派におけるように）言語を外界を捉える「第一次モデル化体系」とし、さまざまな文化現象の背後に想定されるコードはすべて言語と相同性の関係に立つ「第二次モデル化体系」として位置づけられるというような考え方をとる。（対象が芸術に限られる場合には、当然この流れは先程の「詩学」をその中に取り込む。）

〈する〉的、〈なる〉的というような「言語類型」――つまり、〈動作主〉を際立たせて表現しようとする言語とそれをなるべく覆い隠して表現しようとする言語という対立――が想定できるとしたら、それと平行するような「文化の類型」も認めることができるのであろうか。

一九三〇年代に一人のドイツの哲学者が日本に来た。この哲学者、オイゲン＝ヘリゲルは東北大学に招かれてそこで教鞭をとるのであるが、その間日本の禅の境地を知るために、弓術を学ぶことを思い立って弟子入りする。（弓術を学んだのは、自分はピストルの射撃が得意であり、的に当てるという点では弓も同じと思ったと述べている。）十分想像できる通り、二つの異質な文化的発想の間で奇妙な、しかし極めて興味深い葛藤が始まる。ヘリゲルは、師匠がもっぱら体得的に悟らせようとする弓道の精神を西洋的な合理主義の立場から翻訳して自分に納得させようとして苦悩し、時には師匠と衝突する。その間の精神的な軌跡は後に著わされた『弓道における禅』（Herrigel：1948）と題する

書物に興味深く描かれているが、その中に次のようなくだりがある。師匠が体得させようとする矢を放つ際の「無我」(ichlos, selbstvergessen)、「無心」(absichtlos) の境地というのが、この哲学者にはどうしても自分で納得できないのである。

「そこである日、私は師匠に尋ねた。

『もし矢を射るのが「私」でないというならば、一体どのようにして矢は放たれることができるのでしょうか。』

『「それ」が射るのです。』

『そのお答えならもう既に何度か承っています。だから改めて言葉を変えて質問させていただきますが、「私」というものがすぐそばに控えていてはいけないというのに、どうして私が無我の境地で矢の放たれるのを待つことができるのでしょうか。』

『「それ」が張りつめた状態で満を持しているのです。』

『でも、この「それ」とおっしゃるのは一体誰なのでしょうか、何なのでしょうか。』」(三版、六五頁)

この書物の中の弓道の師匠は、無我の境地で矢が弓から放たれる状態を説明するのに二つの比喩をよく使っている。一つは竹に積った雪がしなんだ枝からついに落ちるさま、もう一つは熟れた果物が枝から落ちるさまである。いずれもそこには矢を射るということを〈する〉主体としての人間の姿はない。ただそのような事態に至る(つまり〈なる〉ということがあるだけである。〈われ〉は主体の地

位を離れ、〈それ〉がその地位につき、〈われ〉を通して自己を実現するのである。この場合の〈それ〉は、擬人的な機能の個体的な〈それ〉では決してないことにも注意しておくべきであろう。それは次第に熟して行く〈機〉、満を持して待つ〈気〉とでもいった(連続体的な)ものである。(ベネディクトが『菊と刀』(Benedict : 1946 : Ch. 11) の中で使っている言い方を借りれば、「無我」とは「『私ガソレヲシテイル』(I am doing it) という意識のなくなった境地」であり、そのような境地に達した時、「行為者は自分の心の中で描いた様子をそのまま完璧な形で再現できる」のである。)

こうした捉え方は確かに「日本的」かもしれないし、西欧的な視点からすれば異質的なものであるかもしれない。しかし、そのことは決して、それが日本独特であるというようなことを意味するものではない。文化人類学関係の書物を見れば、同じような記述が他の民族についてなされているのに出会う。例えば、ウォーフ(Whorf : 1956 : 155) は西欧的なダンスは「動きに対する歓び」の表現であり、スポーツにもこの「動きの詩」(poetry of motion) とでも言うべき要素が多く入り込んでいること、それに対しホーピ族の踊りやスポーツは身体の動きよりもむしろ精神の持続的な集中性、高まり('endurance' や 'intensity' という言葉で表わされている)によって特徴づけられていると述べている。こういった文化では、事はそういった気分がある所にまで達した時に始まる。何もしないでただ坐っている(と西欧の人間には見える)アフリカの人間は、「時間を浪費しているのではなく、時間を待っている、あるいは時間を創っているのである」とムビティ(Mbiti : 1969) は自らの意識を説

明している。そのようなところでは、何時からと問うのは意味がない（Hall：1954：Ch. I）。人間が始める（〈する〉的）のではなくて、「事態が整ったら（when things are ready）」（Hall）始まる（〈なる〉的）のである。アメリカに留学していた頃、始めて日本の映画を見たアメリカ人の学生が刀を構えた二人の武士がにらみ合ったままいつでも切り合いを始めないのが実に奇妙だと語っていたのを思い出す。二人の武士は「何もしていない」（not doing）と映るのである。（しかし、勝負はその間に決まっている。そして何かが起こったと思う時は、刀の一瞬の閃きと徐々に体勢を崩して行く一方の武士の姿によってすでに決まった結果が顕在化されるだけのことなのである。）伝統的に「国技」とされて来た相撲に仕切り制限時間が持ち込まれたのは明らかに〈なる〉的世界への〈する〉的な秩序の導入であった。ヘリゲルの書物には、いつになったら弓道の極意が分かるのかと焦る自分に師匠が言いきかせた次の言葉が引用されている。

「どうか辛抱強く、何がどんなふうに現れてくるか待ってごらんなさい。……目標へ至る道は測るわけには行きません。何週、何か月、何年などということに何の意味がありましょう。」（三版、六四頁）

「完成」よりも「完成」に至るまでの精進を重く見るこの見方――シンガーの眼に「完結していないこと（Not Quite Finished）に対する日本人の愛着」（Singer：1973；144）と映ったものは、日本語の「運動」や「行為」の動詞が指向性を表わすだけで必らずしも到着や達成を含意しないという特徴

（三六―七頁参照）とすら、奇妙にも結びついてしまうのである。

言語を離れて言語以外の文化の分野に入って行けば、例えば個人主義に対する全体主義、分析的思考様式に対する非分析的把握、人間中心の哲学に対する自然中心の哲学、積極的な行動様式と消極的な行動様式など、〈動作主〉指向型と〈出来事全体〉把握型（つまり、〈する〉的と〈なる〉的）という対立と相関するように見える特徴がすぐに思い浮ぶ。これらの間に実際に相関関係がありうるかどうかというのは極めて興味深いことではあるが、もはや言語学の範囲を遥かに越える問題である。

最後に、これまでの一連の議論の出発点となった「場所理論」についてひとこと触れておこう。本書の導入の部分では、「場所理論」というものを現代的な視点から規定し直し、〈変化〉の表現に関しては、もっとも〈具体的〉な〈場所の変化〉の表現のための構造式がより〈抽象的〉な〈所有権の変化〉、〈状態の変化〉へ転用される（そして〈状態〉の表現に関してもそれと平行した転用が行なわれる）という仮説として捉えてみた。そして最終章において検討した通り、この仮説は英語のような言語（多分印欧語一般と言ってもよいであろう）にはかなりの妥当性を持っているように思われる。しかし、同時に日本語のような言語では〈状態の変化〉ないし〈状態〉という観点からの捉え方がもともと全域を覆っており、〈具体的〉であるか〈抽象的〉であるかという点に関しての対立はそれほど有意義でないということも明らかになった。つまり、先に規定したような形での「場所理論」は日本語のような場合には十分意義あるものとは思えないということである。しかし、英語での〈変化〉の

基本的なイメジが個体の場所的な移動であるとするならば、対応する日本語の場合の〈変化〉の基本的なイメジは何であろうか。

多くの言語において〈動く〉を意味する動詞は二つのやや異なる場合に用いられる。一つは場所の移動を伴なう動き（〈行く〉、〈歩く〉、〈進む〉など）であり、もう一つはそれを必らずしも伴わない動き（〈回る〉、〈震える〉、〈延びる〉、〈膨らむ〉など）である。前者の動きが〈場所の変化〉であるのに対し、後者の動きは〈状態の変化〉に（そして、変化が恒常化すれば〈状態〉に）近づくということは既に述べた（三五頁参照）。前者は「運動学的」(kinematic) な概念であり、個体の動いた距離や速度が問題になる。後者は「動力学的」(dynamic) な概念であり、「静」の中に「動」を含むという形で蓄積されたエネルギーや強度とその変化が問題になる基本的には連続体的な世界である。日本語の動きのイメジは基本的にこの後者の型に基づいているように思えるのである。興味あることにウォーフ (Whorf : 1956 : 56) はホーピ語がまさにそのようなイメジに基づいて捉えられると語っているし、日本人は変化と恒常の重なる事象に特別の感動を抱いたのではないかという指摘（作田、一九七五、一五六）も大変興味深い。

〈場所の変化〉、〈所有権の変化〉、〈状態の変化〉という区別が曖昧になる可能性があることを指摘した時、まるで〈状態の変化〉という範疇の優勢化によって既存の整然とした秩序が破壊されるというような書き方をした。しかし、実際には歴史的にはまさにその逆のことが起ったのではないかと想

像される。つまり、もともとあったのはすべてを〈状態の変化〉として捉える未分化な見方であり、それが後に人間性の自覚を通じて場面とは対立する個体としての自己中心的な捉え方へと変って行ったのではないかということである。実際、人間のごく素朴なレベルの感覚では例えば〈春〉というものが〈来る〉というような捉え方ではなくて、確かに〈春めく〉、つまり、次第次第に春らしくなるのが肌を通して感じられるというような捉え方であろう。その意味では〈なる〉的な性格の言語の方が、人間の言語の本来の自然な現れ方を示しているのではないかと思える。逆に言えば、〈動作主〉の概念に特別の地位を与え、それを中心に文の構成を行なうというのはむしろ新しい発達に属するのではないかということである。自分たちの力を越えた自然の力、さらにまた超自然的な力によって左右されている人間が、次第に自らの力で自然を征服して行く人間に変って行く――そのような人間としての自己の存在についての自覚が言語の表現形式にもある種の変化を導入して来たのではないか――これはスペキュレーションとして大変魅力的に感じられる。そのような観点からすると、英語は（例えば同じゲルマン系のドイツ語などと較べてみても分かる通り）ある方向にもっとも極端な発達を示した言語と言える。（その意味では、英語は特殊な言語であるとすら言える。）英語との対比で言えば、日本語の方は人間言語の「原型」的な特徴をまだ多くとどめているように思える。いずれの言語も、その意味では大変興味ある研究対象である。ただ、少なくとも、両者の間に明らかに存在する類型的な差異を十分踏まえた上で、考察がなされなくてはならないであろう。